



料理監修者と打ち合わせを重ね、誕生した新しい器。赤を車体の色に近づけるため、釉薬を調合し、14種類の試作から一番近い色を導き出した。



高級感ある光沢レッドは自社が追求した提案色。ボディー下部の通常は塗らない機械部分にまで入念に塗装。精力的な作業で2か月の工期内に完成させた。



ぬくもりある木を緻密かつ繊細に組んで車内の空間を創り出した大川組子の衝立(ついたて)。見る角度によって、光と影をまといながら様々に表情を変える。



国内初といわれる天井全面のステンドグラスや床全面の組板。床には2万2千ピースが貼り付けられ、壁面にも薄くスライスした木をふんだんに使用した。



何度も福智町へ足を運び車両を入念に確認。壁や椅子の模様もすべて水戸岡氏がデザインしたもの。利用者目線で設計し、見つけた課題は徹底的に改善した。

匠がかけた

技と想い

匠たちの心意気が最高の車両と空間を生み出しました。

「上野焼の器で食事を楽しんでもらいたいの思いで、料理監修の意向に添えるよう色合いや重厚感を器で演出しました。窯の温度を何度も変えて試作を重ね、窯が耐える限界の温度にまで高温にして挑戦。光沢のあるメタリック調は今回のチャレンジで初めて出せた色です。季節の料理とともに上野焼のぬくもりも感じてもらえたらうれしいです」。

挑戦から生み出された上野焼の器

「深紅に輝く鏡面のボディーは、下塗り、中塗り2回、仕上げ、クリアの5工程の塗り重ねで、丹精込めて磨き上げたもの。その車体は陽光や天候によって表情を変え、それぞれに良さがあり、見飽きることがありません。初出庫の姿を見たときの感動は今も鮮明に覚えています。見る人、乗る人にもそんな感動を覚えてもらえたら、僕らも幸せです」。

風景をも映し込む深紅の光沢ボディー

「水戸岡先生のため、全面協力で引き受けました。お客様に触られてもいいように強度を上げて作成。すべて誤差1mmもなく作り込み、両面から見えるよう、2組の組子をひとつに合わせる新しい手法にもチャレンジしました。100の要求に100で返すのはあたり前。私たちは120、150でお返ししたい。そのことがお客様の喜びにつながると信じています」。

繊細な組子が紡ぎ出す木と光の芸術

「職人の思いが詰まっていれば空気で伝わる。車内に入った瞬間に感じるものです。水戸岡先生が言う『きちんとした仕事』を念頭に妥協せず細部まで作り込みました。四季折々の姿を見せワクワクさせてくれる『ことこと列車』は、これから感動を追求することで進化する列車。沿線の人に手を振ってもらえる列車へと育っていくことを楽しみにしています」。

「車両は生きもの」地域が育てる

「日本のローカル列車では過去最高の列車かもしれません。これまで培ってきた技術を惜しみなくこの列車に注ぎました。最高の職人たちが技術を駆使し、魂をこめてようやく完成した列車。地元の方々にまず乗っていただき、沿線を見つめ直してほしいですね。この列車が一つの核となって、沿線が活性化することを願っています」。

今まで培った手法と技術を注ぎ込んだ



上野焼 庚申窯
高鶴 裕太 さん
(こうづる・ゆうた)
独自の作品が人気を集める期待の若手陶芸家。東京都内でも有名レストランでも器が採用されている。その評判から今回の主要な器を担当。



株式会社 北九州プラスト
二見 修司 社長
(ふたみ・しゅうじ)
みやこ町にある北九州プラスト。沿線に住む者としてこの仕事に携われたことは何よりの誇り。その気持ちを込めて丹念に磨き上げた。



木下木芸
木下 正人 代表
(きのした・まさと)
JR九州「ななつ星」や「或る列車」での大川組子を製作。水戸岡氏がデザインした幾何学文様を忠実に再現し、圧倒的な美を紡ぎ出す。



株式会社 九州鐵装
磯邊 謙一 社長
(いそべ・けんいち)
今回の限られた予算と納期の中、溶接ゼロの改装に挑戦。既存の物を最大限に生かす、今後につながる新たなノウハウも獲得した。



ドーンデザイン研究所
水戸岡 鋭治 代表
(みとおか・えいじ)
日本を代表する工業デザイナー。「ななつ星」や「或る列車」など多数のデザインを手掛ける。その厚い人望から、職人が技を結集した。



福岡県交通政策課
森 義篤 参事補佐
(もり・ともあつ)
観光列車導入と国の地方創生事業を結びつけたキーパーソン。水戸岡氏が「彼なしでは実現しなかった」と信頼する県庁の担当リーダー。